学び生かそう！先人の思い

不屈の熱意

「今年の合唱コンクールは金賞をとろう」とクラスで目標を決め、練習が始まった。千絵は自分から指揮者に立候補した。クラスのみんなも金賞を目標に積極的に練習に参加していた。しかし一ヶ月経ったころ、練習が終わった後の実行委員会の話し合いで、伴奏の啓介が声を絞り出すように、

「もうやりたくない。」

と突然言い出した。慌てて千絵が訳を尋ねた。

「千絵さんだって分かっているはずだよ。最近、みんな真面目に練習してくれないじゃないか。こんなことなら遊んだり、部活したりしたいよ。」

それを聞いた千絵は、その後何も言えなかった。自分も啓介と同じように感じていたからだ。確かに最近のクラスの練習は決して充実していなかった。合唱コンクールの練習を投げ出したい自分がいる一方で、それを許さない自分もいる。千絵は複雑な想いのまま家に帰った。

その日の夕食で、暗い表情をしてご飯を食べていた千絵に祖父が尋ねた。

「ご飯おいしくないのかい。学校で何かあったんだね。」

自分の心を見透かされたようで少し慌てた千絵であったが、祖父に学校であったことを話した。すると祖父は微笑みながらゆっくりと言った。

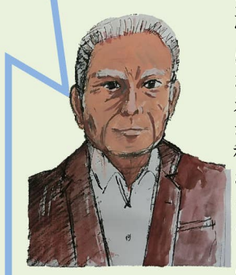
「このお米おいしいだろう。このお米は木田地区で穫れたお米なんだよ。木田地区で豊富にお米が穫れるようになったのはある人物のおかげなんだ。誰だか知ってるかい。」

「えっ。何でそんなことを聞くの。知らないよ。」

「池田助右衛門というんだ。」

祖父は、千絵の驚いた表情を確かめるとまたゆっくりと話し始めた。

豊富な水で育つ稲



今から三百六十年ほど前は、木田地区は小高い丘陵地のため、川の水を田畑に引き込めず、少しでも日照りが続くと、農作物は枯れてしまい、村人たちは苦しい生活を送っていたんだよ。このことに心を痛めていた加治木の郷士、池田助右衛門は獺貫滝の上から水を引けば、木田地区の平野に水を引くことができると考えたんだ。そして、理解者を集め、加治木島津家当主忠朗に願い出て、用水路つくることを許可され、工事をすることになったんだ。最初は村人も奮って工事に参加したが、岩石が非常に硬くて予定通りに工事は進まなかったんだ。すると、次第に工事への参加者は減り、工事費も膨れ上がり、やがて資金は底を尽いてしまい、理解者も離れて遂に、助右衛門は孤立してしまったんだよ。

この状況では工事はすぐに中断すると多くの村人が思っていたが、なんと助右衛門はその後も私財を投じ一人で作業を続けたんだよ。夜中に滝に打たれて成功を祈願し、鑿に鎚をふるう姿に多くの村人が心を動かされ、再び村人たちが手伝い始めたんだ。

そして遂に、三年七ヶ月後、助右衛門の熱意は、約二百十八メートルの岩盤を掘り抜いた。西別府からの水が勢いよく流れ込み、出口のある木田には滝のように水が流れ落ちた。その後、ここは「獺貫の切落」と呼ばれるようになったんだ。村人たちは驚き喜んで、下流域の用水路を整備し、土地を開墾したため、水田が増えて木田地区は驚くほど多くの農作物の収穫ができるまでになり、現在の木田用水は全長約五千六百メートルの水路になったんだよ。

西別府から見た木田地区

話を聞きながら千絵は、木田地区には、すごい人がいたんだと嬉しくなった。祖父は話し終えると千絵の顔をそっとのぞき込み、

「千絵が助右衛門だったら、一人で掘り続けるかい？」

と静かに尋ねた。

「……。」

千絵は、自分なら一人でできるだろうか。という思いを祖父から問われ驚いた。それと同時に、祖父がなぜ池田助右衛門の話をしているのかを考えると、今の自分に足りないものは何かはっきり分かった気がした。

それから数日後の日曜の朝、祖父が千絵に、

「これからちょっと出かけたいところがあるんだが、一緒に行ってくれるかい。」

と、声をかけた。千絵はこくりと頷いた。

祖父は慣れた足取りで進み、あるところに着くとゆっくりと振り返り、千絵に微笑んで言った。

「ここが獺貫の切通だよ。池田助右衛門は毎日鑿に鎚を振るい、どんな思いでここに一人で立ち続けたのだろうね。水が流れ出たとき、どんな思いで眺めたのだろうね。おかげで、こうして農作物ができるようになり、ありがたいことだね。」

千絵は獺貫滝の周辺の硬そうな岩盤を見て、改めて池田助右衛門の偉業を実感した。そして、水が豊富に流れている水路とその一帯の黄金色の稲穂が風にたなびいている様子を見つめていると、合唱コンクールのことが思い出され、自然と体に力が入っているのを感じた。

整備された用水路

獺貫滝